

課題 22 「教育」をめぐる内なる意識を問い直してみよう！

「これは、ある友人の童話作家から聞いた話のプロットです（…）。

……南の海の真ん中に、トロンペライという小さな島がありました。

島の人たちは、みんな明るい笑顔で旅人を迎えてくれましたが、どこかせわしように、小股内股、下を見ながらチョコチョコ歩きます。しかも、お役人やら先生やら、偉そうな人ほど、せわしないのです。

夕暮になると、島の真ん中にある山の階段に子どもたちが集まってきて、一生懸命、階段のぼりの練習を始めます。子どもたちは、必ず一段ずつしかのぼらない。決して、大股に駆け上がったりにせず、一段ずつ踏みはずさぬよう、下を見ながら、せわしなく駆け上がる。そんな練習を、それこそ涙ぐましく続けているのです。そして、その下ではお母さんたちが、わが子の特訓風景を、心配げに、でもどこか誇らしげに見ているのです。

これはどうしたことか。実は、この島では 17 歳になると、階段のぼりの測定検査をする。一段ずつ踏みはずさずに、速く正しく山の上まで駆け上る競争。そして、その出来具合が、将来を決めることになる。階段のぼりの優秀な者はこの島で有利な地位につき、それが苦手な者は、なかなか認められることがない。この島で出世できるかどうかは、この階段のぼりの出来次第というのです。

どうしてそんなことになったのか。島の長老によれば、昔々、王様は山の頂上に住んでいた。海岸から早く伝令を伝える必要がある。しかも、姿勢正しく。でも、今は何の意味もない。象徴的な意味だけが残っているというのです。

そして、誰もが、これは変だと思っている。しかし、有能な子どもを見つけ出し、努力する子としない子の見分けをつけるには、他にどんな方法があるのか。誰にもわからず困っているというのです。

こうして、この島では、子どものころから階段のぼりに励みます。少しでも速く駆け上げられるようになると、お母さんは喜ぶし、周りのみんなも褒めてくれます。その子も得意になりますし、自信を持ち、誇りを感じます。逆に、階段のぼりの苦手な子は、褒めてもらえない。自分はダメな人間なんだと思いこむ。そして、好きでもない階段に向かって行くか、全くしよげてしまって、何もかもイヤになってしまうか、どちらかでした。

練習し過ぎて、足はボロボロ。小股で下をむいて、体も心も縮こまって見えました。でも、島の長老たちは言いました。若い頃の苦労はいいことだ。しかも、努力した分だけむくわれる。何とも公平なことではないか。……こうして、この島の子どもたちは、遊ぶ時間もなく、階段のぼりに励んでおりました。（…）」

〔西平直『教育人間学のために』東京大学出版会、2005 年、43-45 頁より〕

課題 1：上の童話を読んで、あなたなりに、この童話の続きと結末を考えてみてください。南の島トロンペライは、その後、どうなったでしょうか？ 自分が童話作家になったつもりで、めいっぱい想像力を働かせながら、それなりにリアリティがあって面白い、物語の続きと結末を考えてみてください。

課題 2：上の童話は、実は、ある「教育」問題を「比喩」を用いて表現した「寓話」になっています。それでは、この「寓話」が「比喩」を用いて表現している「教育」問題とはいったい何でしょうか？ 考えてみてください。

《引用・参考図書》

■西平直『教育人間学のために』（東京大学出版会、2005 年）